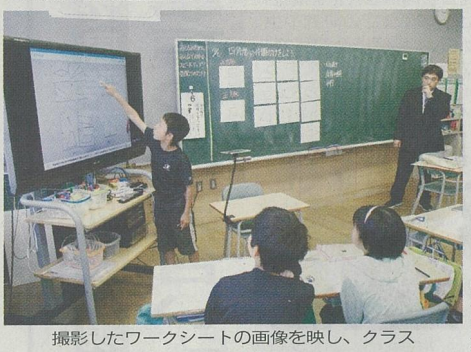
日本教育新聞　平成28年（2016年）10月24日（月曜日）

タブレット端末活用で学習意欲高まる

札幌市立厚別東小学校

「学習科学に基づく『21世紀型スキル』形成を促す協働学習の開発」をテーマに、札幌市立厚別東小学校（足立教校長、児童325人）では、ＩＣＴ機器を活用した実効性のある学習づくりに取り組んでいる。パナソニック教育財団の特別研究指定校として12月２日に研究発表会を開催し、総合的な学習の時間で校区の魅力をデジタルリーフレットにまとめる４年生の授業などを公開する。全体会では各教科・領域などの取り組みやその成果も披露する。



撮影したワークシートの画像を映し、クラス全体で考えを共有する場面もあった

ＩＣＴ機器の実用性理解し日常の授業づくりを

教師が提示したさまざまな四角形のカードが配られ、それをワークシートの上に並べて、理由を考えて分類していく子どもたち。垂直や平行といった四角形の構成要素に着目させ、台形や平行四辺形の新しい学習へとつなげていく算数の授業だ。

構成要素となる平行や垂直などが一目見て分からない部分は、三角定規や分度器を使って確認。完成したワークシートはタブレット端末で撮影し、その画像を使って全体で交流する場面もあった。

これは12月の公開研究会に向けた最後の研究授業の一コマ。研究部長の福島優介教諭が提案したもので、研究協議では効果的なタブレット端末の活用などに関する話題が上がった。

学校全体として課題だったのは「相手意識」。本年度、子どもたちがプレゼンなどの表現の部分でＩＣＴ機器の活用が多くなってきたという。委員会活動やクラブ活動を紹介する動画の作成、理科実験で記録したものを見直すなど、学習に加えて日常生活でもＩＣＴ機器を活用することが多くなった。「使いたいから使う」から「必要だから使いたい」へ。

タブレット端末を使い、ワークシートを撮影している児童

キーワードの関わり指導案の中で明確に

そのため、力を入れて取り組んできた「交流」と重ね合わせ、昨年度からパナソニック教育財団の特別研究指定校としての研究にも着手した。

1年目は教える環境を整えた後、まずは実物投影機を導入し、それをタブレット端末に置き換えて発展的な活用に取り組むようになった。足立校長は「教師一人一人がＩＣＴ機器の良さや実用性を理解し、それを日常の授業づくりに生かしてくれれば」と期待を寄せている。

小学校

こうした目的意識をはっきりさせた活用を目指し、各教科・領域などでの実践を積み重ねている。

同校の研究テーマでキーワードになるのは、「学習科学」「21世紀型スキル」「協働学習」の三つ。その点を踏まえ、学習指導案の中には当該単元で「ＩＣＴ」を中核にした関わりを明確にしている。

また、「学習活動ルーブリック」も作成し、「知識・理解」や「技能・活用能力」などの観点をベースにした評価規準で見取ったことを指導に生かしている。12月の公開授業でも資料として提供する予定だ。

タブレット端末が37台、実物投影機が全教室、電子黒板が視聴覚教室に1台などのＩＣＴ環境にある。研究部長の福島教諭は「タブレット端末などがあるからこそ、『ある良さ』と『ない良さ』を吟味しながら授業のバリエーションが膨らんだ」と振り返る。また、プロジェクトリーダーの信野教諭は「タブレット端末の活用は、子どもたちの学習意欲を高めることが多かった。特に高学年では、その成果がよく見られた」と話している。

厚別東小＝☎011・898・4650

紙の良さもうまく生かす

中川　一史・放送大学教授

各教科・領域などで「子どもが情報を整理し、自分の考えをきちんと明確にする」というのが、同校の特色の一つである。そのためのツールとして、タブレット端末を活用しているが、福島教諭の算数の提案授業では紙の良さもうまく生かしていた。「比較・分類」の場面では、子どもたちが印を付けたり囲みを書き加えるなど、途中で書いたり消したりできるのは紙の方が効率的だからである。

デジタルの良さには、「焦点化」と「共有」の二つがある。そのどちらかを選択し、教師は授業をどのようにデザインしていけばよいのか。例えば、「共有」に関しては、タブレット端末の撮影機能で学習の記録や履歴を残し、それを成果物として授業で活用することなどが考えられる。

12月2日の公開研究発表会では、こうしたＩＣＴをどう活用すべきかのバリエーションが見える実践提案も期待したい。